

大学生による「生徒指導」の記憶と評価について

農業科 高柳 真人

1. はじめに

1988年に「教育職員免許法」の一部が改正された。それに伴う「教育職員免許法施行規則」の改正(1989)により、「教職に関する科目の単位の修得方法」(第六條)に「生徒指導、教育相談及び進路指導に関する科目について修得するものとする」ことが定められた。生徒指導等の科目が教職科目に取り上げられるようになった理由として、原野(1993)は「教科の学習・教授中心の教育から、生徒の人格完成、人間形成重視の教育への転換」があると述べている。

齊藤(1969)が「学校教育の中核となるものは、どこまでも授業という仕事である」と述べているように、学校教育における学習指導の重要性について、異論を唱える者はないであろう。しかし、不登校、いじめ、校内暴力、学級崩壊などといった問題が取りざたされるなど、今日では、学校の在り方そのものが問われており、学習指導と並び、生徒指導の意義が認識されてきたように思われる。しかし、今日求められている生徒指導とは、表面的な問題行動に対する対症療法的対処のことではない。むしろ「生徒指導の原点に立ちかえって、生徒の内面、心に目を向けて、生徒一人一人のよりよき発達を促すような指導の充実に努める」(文部省、1988)ことが求められているといえるだろう。

現在、学校で行われている生徒指導に関わる指導内容のある部分については、家庭教育や社会教育が担うべきではないかという議論がある。そのような主張については、肯首できるところもある。しかし、小林(1997)が指摘するように、現在学校が抱えている「問題を醸成しないこと、すなわち問題を予防すること」の主役が教師であるという指摘にも耳を傾ける必要があろう。すなわち、「教師は学校環境の中に存在し、子どもに時間的に最も長く関わることができる。学校環境の維持、改善を行うこともできる。そして、そのために、学校にいる唯一の専門性を持った人なのである」という主張である。

学習指導と並び、生徒指導が学校教育に果たす役割はやはり大きいと思われる。文部省によれば、「生徒指導とは、本来、一人一人の生徒の個性の伸長を図りながら、

同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現が出来るような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すもの」(文部省、1988)であり、「学校がその教育目標を達成するための重要な機能の一つ」(文部省、1965a)である。

このような意味での生徒指導は、戦後、アメリカのガイダンス理論の導入から始まったことが知られている。それは、山下(1994)が指摘するように、「学習指導(教科指導)とともに学校教育を支える車の両輪と言えるもので、すべての教師にその力量を要求されている」ものであるといえよう。

しかし、国分(1987)が指摘するように、「これが生活指導(生徒指導)と日本語でいわれる場合には訓育的・マネジリアルな色彩が強くなる。そしてその訓育的な生活指導が旧軍隊の内務班にも似た全体主義や絶対服従の傾向を示すことがある」といわれるように、学校においては、必ずしも文部省の定義に示されるような生徒指導が行われているとはいえない面があるように思われる。

この点について、庄司(1999)が、「実際に生徒指導はどのようなことに関して、どのような形で行われている」のかを調査するため、「生徒が教師の『生徒指導』をどのように記憶しているのかを『生徒指導の記憶』として、教職科目の『生徒指導』を履修する学生200名ほどに記述してもらった」ところ、次のようなことが明らかになったという。

すなわち、「第1に、最も多いのが校則違反の検査・チェックである。…第2に、日常生活・生活態度に関する注意・指導。第3に社会生活のルールに関する指導である。…第4に人間関係に関する指導。…第5に生徒の健康と安全に関する指導。…第6に進路指導があげられ、「ポジティブなものよりネガティブなもの…がより多く記述される」という。生徒指導の重要性が認識されてきたとはいえ、現実には、現在でも、「青少年非行の対策といったいわば消極的な面」(文部省、1965b)への指導が行われている割合が高いのではないかということが考えられる。また、「①ほとんど印象がない、②覚えていない」という回答も特徴的であったという。生

徒指導そのものが行われていない学校もあるのではないかと考えられる結果が示されたといえよう。

「生徒指導」を教職科目で指導するに当たり、教師の仕事について理解を深めるような授業を構想するとすれば、文部省の定義に沿った「生徒指導」の理念的な側面について指導するとともに、学校で行われている「生徒指導」の実際を踏まえた指導計画を立てることに意義が認められよう。また、「生徒指導」を受講する学生が、生徒指導に対して、どの程度その重要性を認識しているのかを理解しておくことは、受講生の構えや枠組みを踏まえた指導を行う上で必要になってくると考えられる。生徒指導に対する印象がネガティブであったり、印象が残っていない学生にとっては、生徒指導の積極的な意義を認めるのは難しいかも知れない。或いは、自分の受けてきた生徒指導が生徒指導のすべてであると受け取め、その重要性を十分認識していない場合もあるかも知れない。

そこで、本研究においては、現在の中学校、高等学校で行われている生徒指導の実際を明らかにすることと、大学生が「生徒指導」の学習に取り組むに当たり、どのような構えを持っているのかを明らかにするため、大学生の「生徒指導」に対する記憶と「生徒指導」に対する評価を調査した。

具体的には以下のような調査が行われた。一つは「中学校、高校でのあなたの生徒指導体験を書いて下さい」と口頭で述べた後、「中高での生徒指導（体験）」と板書したもの。もう一つは、受講生が「生徒指導」どのように評価しているのかを明らかにするため「教職において学習指導を100とすると生徒指導の評点は？」と口頭と板書で問いを提示したもの。学習指導との比較をさせ、学習指導と比べた相対的な評点で評定することを求めた。

調査対象は、平成11年度国立A大学の「生徒指導」受講生である。第1回目の授業開始時（講義を始める前）に、用紙を配り、質問に対し、自由記述で回答を求めた。回答は休憩時間に回収した。118名の回答が回収され、後日、分析が加えられた。

2. 中学校、高等学校の生徒指導に対する記憶

(1) 指導形態とその内容に関する記憶

個別指導、集団（全体）指導などの指導形態に関する記憶として多く挙げられたのは、HRや学年集会、全校集会、校門指導など、集団を対象とした指導に関する記憶で、回答者は39名（33.1%）であった。

回答のうち、集団的な指導の内容が挙げられたものうち、主なものを挙げると以下のようなものである（図1）。

| |
|-------------------------------|
| 服装検査…39名（33.1%） |
| 頭髪検査…20名（16.9%） |
| びん、ツカス、爪、靴等の身だしなみ検査…11名（9.3%） |
| 生活態度指導…13名（11.0%） |
| 校則・きまり指導…7名（5.9%） |
| 遅刻欠席指導…7名（5.9%） |
| 安全指導…5名（4.2%） |
| 登下校のマナー…4名（3.4%） |

図1 集団を対象とした指導の内容

記憶に残る指導の内容としては、服装検査や頭髪検査など生徒の外見の指導に関して、延べ70名（59.3%）からの回答があった。また、生活態度や規則・きまりなど、学校生活の過ごし方に関する回答が延べ36名（30.5%）から得られた。これらの指導は、生徒の社会生活への適応を促進したり、集団生活におけるルール遵守の態度育成に関する指導内容であるといえよう。しかし、先に述べた分け方をすれば、どちらかと言えば、問題行動への対応という性質を持った「消極的な」生徒指導であると解され、「生徒一人一人のよりよき発達をめざした」積極的な指導としての性格は強くないように思われる。これらの指導を記憶する者が多いのは、庄司（1999）の調査結果と一致するものであるといえよう。

一方、19名（16.1%）に、個別指導の記憶に関する記述がみられた。その内容は、生活目標などを話し合う面談を挙げた3名を除いて、特定の生徒に対する指導に関するものであった。すなわち、「問題を起こした生徒への対応」、「校則を守らない生徒だけに絞られて行われていた」、「俗にいうヤンキー対象」、「問題児に目を光らせる」といった記述にみられるように、問題行動を起こしたり、起こしそうと判断された特定の生徒を対象としたものである。このように、全ての生徒でなく、問題行動を起こしがちな生徒のみを対象とする生徒指導も、積極的なものであるとはいえないであろう。

それでは、積極的な生徒指導が行われていることを示す回答がないかということ、そうではない例も挙げられている。代表的な例として、進路指導が挙げられよう。その詳しい内容についての記述はほとんどみられなかったが、進路指導が記憶にあるという回答が、29名（24.6

%)にみられた。生徒が進路先を検討する際に、生徒の生き方なり方を踏まえた指導・援助が行われている例も少なくないと考えられ、進路指導は広い意味での積極的な生徒指導の範疇に入ると考えられる。

(2) 生徒指導の受け取り方

生徒指導に対する受け取り方として多かったのは、ネガティブな反応で、17名(14.4%)の回答があった。具体的には、「規則が厳しい」、「管理されている感じ」、「しなくていいことをして、しなければいけないことをしていない感じ」、「もっと他にやることはないのかと思わせるもの」、「暖かいものを感じられない」、「心のケアは何もされなかった」、「一方的に規則を守りなさいという指導のみ。なぜそんな規則があり、どうして守らなくてはいけないか説いて欲しかった」、「嫌な思いをした」などである。また、印象が薄いか生徒指導を受けた体験がないといった回答が8名(6.8%)であった。これらの反応からは、積極的な生徒指導が行われているというイメージは浮かびにくいといえよう。

また、中学校と比べ、高校の方が自由、個性が尊重されているとか、生徒指導がほとんど無かったという回答が16名(13.6%)であった。高校の方が中学校より厳しいという回答は2名である。より自立性が高まると考えられる高校において、生徒の自主性を尊重する傾向がみられるといえよう。

その一方で、ポジティブな回答も15名(12.7%)にみられた。中学時代では、「担任の先生との面談の場がコミュニケーションとして非常に良かった」、「生徒指導室が開放され、先生と話し、悩みや不安が軽減した」、「先生とよく遊び、その中で悩みを相談できた」、「学級委員としての自分を先生が支えてくれた」など7名から、教師・生徒の人間関係の重要性を物語るような回答が具体的に挙げられた。高校時代では、「生徒のことを一番に考えてくれた先生がいた」、「社会や学校のルールを教えられた」、「進路指導が役立った」など、暖かい人間関係に関する回答や、生徒の社会化や自立に向けての指導に関する回答が8名から寄せられた。

3. 大学生の生徒指導に対する評価

(1) 評点の分布

118名の回答者のうち、「生徒指導の概念がよくわからない」ので評点は「わからない」とした者1名、評点無記入者4名の合計5名を除く113名の評点について分析を行った。中学校と高校で評点が違う場合(3例)や

進学校とそうでない高校で評点が違う場合(1例)、それぞれの評点を0.5人分として集計した。また評点に幅をもたせてある場合(例えば50~60点など2例)は、その平均点(例の場合55点)をとった。その結果、評点は250点から5点までに分布した。評点の分布の状態を図2に示す。

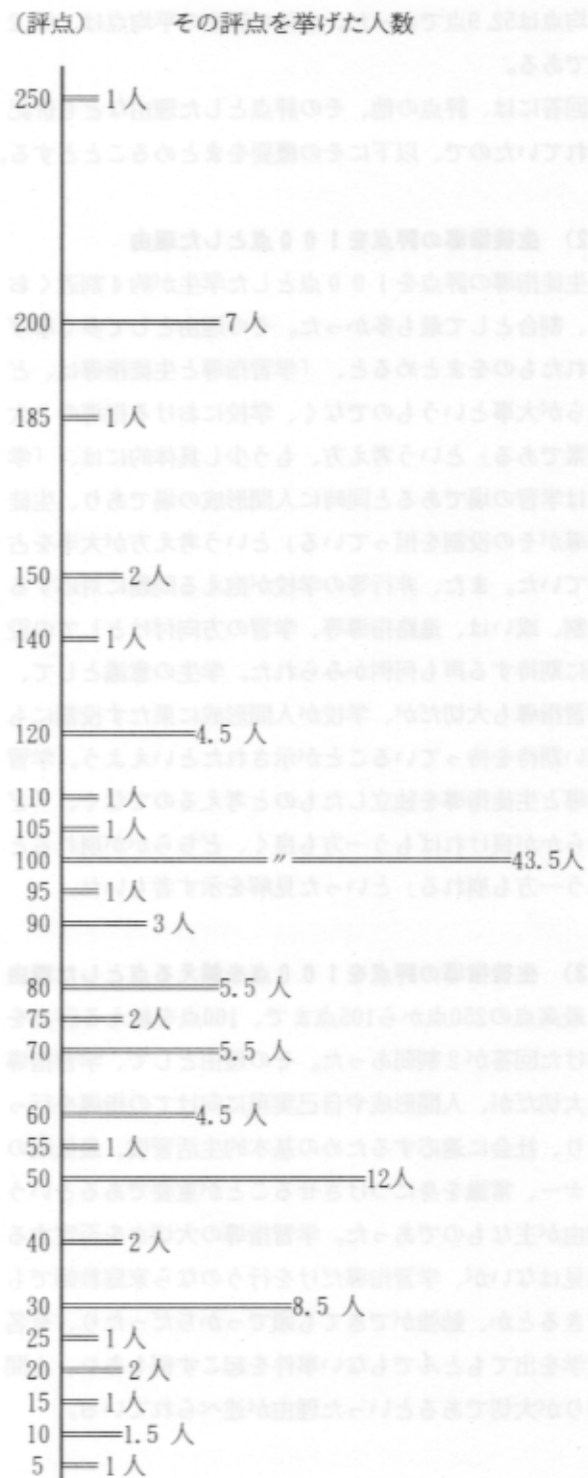


図2 学習指導を100とした時の生徒指導に対する評点の分布

一番多かったのは100点とする者で、43.5名(38.5%)おり、次いで50点とする者12名(10.6%)、30点とする者8.5名(7.5%)、200点とする者7名(6.2%)と続く。また、100点を越えた評点をつけた者は18.5名(16.4%)おり、その平均点は163.8点であった。100点以上とした者は62名(54.9%)、平均119.0点であり、逆に、100点未満の評点をつけた生徒は51名(45.1%)であり、その平均点は52.9点であった。全体の評定の平均点は、89.2点である。

回答には、評点の他、その評点とした理由なども併記されていたので、以下にその概要をまとめることとする。

(2) 生徒指導の評点を100点とした理由

生徒指導の評点を100点とした学生が約4割近くおり、割合として最も多かった。その理由として多く挙げられたものをまとめると、「学習指導と生徒指導は、どちらが大事というものでなく、学校における指導の2大要素である」という考え方、もう少し具体的には、「学校は学習の場であると同時に人間形成の場であり、生徒指導がその役割を担っている」という考え方が大半を占めていた。また、非行等の学校が抱える問題に対応する役割、或いは、進路指導等、学習の方向付けとしての役割に期待する声も何例かみられた。学生の意識として、学習指導も大切だが、学校が人間形成に果たす役割にも高い期待を持っていることが示されたといえよう。学習指導と生徒指導を独立したものと考えるのではなく、「どちらかが良ければもう一方も良く、どちらかが崩れるともう一方も崩れる」といった見解を示す者もいた。

(3) 生徒指導の評点を100点を越える点とした理由

最高点の250点から105点まで、100点を越える評点をつけた回答が2割弱あった。その理由として、学習指導も大切だが、人間形成や自己実現に向けての指導を行ったり、社会に適応するための基本的な生活習慣、最低限のマナー、常識を身につけさせることが重要であるという理由が主なものであった。学習指導の大切さを否定する意見はないが、学習指導だけを行うのなら家庭教師でもできるとか、勉強ができて頭でっかちだったり、有名大学を出てもとんでもない事件を起こす例もあり、人間作りが大切であるといった理由が述べられている。

(4) 生徒指導の評点を100点未満の点とした理由

95点から5点まで、100点未満の評点をつけた回答が、約45%あった。「学習指導と同じくらい、生徒指導は大

切」としながらも評点が100点より低い回答、「生徒指導は大切と思うが現実には学習指導の方が大きい」という回答が多かった。学生が過ごしてきた中学校、高校時代の経験から、学校は勉強するところという意識をより強く持っている場合が少なくないのではないと思われる。その他、「学習指導は学校で行い、生徒指導は家庭や交友関係でも学ぶ」といった考えや「自分の考えをしっかりと持っている生徒もいる。生徒自身による生活を尊重し、厳しくしたり、干渉し過ぎない方がよい」といった回答もいくつかみられた。これらの回答は、回答者の経験を反映したものであると考えられる。生徒指導も、生徒の発達段階や指導の機会を適切に設定することで、よりその効果が挙げられると思われる。しつけと訓育的指導の関係や人間関係作り、自己指導能力の育成といった観点について、指導する側が自分なりの見解を持っておくことが求められているといえよう。

4. おわりに

今回調査対象となった大学生が中学、高校時代に受けた生徒指導は、全体的に「消極的な」指導が多かったように思われる。こうした指導に対し、あってはならないものとして否定することはたやすいが、今回の調査でも「当時は反発したが、生徒全体をまとめるには適切だと思う」という回答があったように、問題行動がみられる場合など、それをそのまま放置しておくことは、問題をいっそう困難にすることが考えられ、こうした指導が行われる背景などについて検討しておくことが必要であると思われる。しかし、そうした消極面の指導だけでなく、「急がば回れ」ではないが「生徒の内面、心に目を向けて、生徒一人一人のよりよき発達を促すような指導の充実に努める」(文部省、1988)積極的な生徒指導も併せて行われていくことが必要であろう。

諸富(1997)は、「学校教育におけるカウンセリングの6つの機能」として、以下の機能を挙げている。

- ①子どもの心を安定させ、生きる意欲を活性化する機能
- ②子どもの自律や自己責任感を育む機能
- ③子どもが抱える心のむなしさや無力感、ストレスを克服させる機能
- ④人間関係を育む機能
- ⑤子どものこころの整理をする機能
- ⑥教師のメンタルヘルスを維持する機能

これらの機能は、諸富によれば「学校におけるカウンセリングの原理・方法を活かしたこころの教育」がもた

らず機能であるということになるが、⑥を除いた①から⑤の機能は、いずれも「生徒一人一人のよりよき発達」をめざす、積極的な生徒指導がはたし得る機能として捉え直すことも可能であろう。

こうした機能が発揮されるために、「教師が子どもの弱音を受けとめる」ことや「教師-生徒関係の質を」上下関係から「『依頼』『感謝』中心の横の関係」に変えること、子どもが『何かを求められ要請されている存在』であると実感できる実践を行うこと、教科や特別活動、道徳の時間などに「人間関係能力を作る機会を意図的・計画的に準備すること」、HR等の時間に内観などを行ってこころの整理をすることなど、具体的な提言がなされている。本調査でも、生徒指導に対するポジティブな印象として、「担任の先生との面談の場がコミュニケーションとして非常に良かった」、「生徒指導室が開放され、先生と話し、悩みや不安が軽減した」、「先生とよく遊び、その中で悩みを相談できた」、「学級委員としての自分を先生が支えてくれた」などといった事例が示すように、積極的な生徒指導から、諸富の提言と重なる諸機能が発揮され得ることが示唆されたということができるとされる。今後、更に、積極的な生徒指導をどう進めていくかということについての指導事例の収集、蓄積が課題となろう。

引用文献

- 庄司一子 1999 「生徒指導」 前田基成・沢宮容子・庄司一子 『生徒指導と学校カウンセリングの心理学』 八千代出版 PP.10-12
- 山下一夫 1994 『カウンセリングの知と心』 日本評論社 pp.233-234
- 小林正幸 1997 「授業および集団で使用可能なカウンセリング [シンポジウム] 学校における教育相談-教師の使えるカウンセリング-」 カウンセリング研究 第30巻第1号 P.81
- 国分康隆 1987 『学校カウンセリングの基本問題』 誠信書房 P.134
- 文部省 1988 『生徒指導資料集第20集 生徒指導研究資料第14集 生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導-いきいきとした学校づくりの推進を通じて-中学校・高等学校編』 大蔵省印刷局 P.1
- 文部省 1965 『生徒指導の手引き』 大蔵省印刷局 a : P.1 b : p.1
- 諸富祥彦 1997 「学校教育におけるカウンセリングの6つの機能 [シンポジウム] 学校における教育相談-教師の使えるカウンセリング-」 カウンセリング研究 第30巻第1号 PP.76-79
- 斉藤喜博 1969 『教育学のすすめ』 筑摩書房